

現代ギリシア語への誘い
— 関本至「現代ギリシア語文法」と
川原拓雄「現代ギリシア語辞典」—

浮田 三郎

私が現代ギリシア語に取り組みだしたのは、大学院に進学してからだった。「なぜ現代ギリシア語を勉強しだしたのか」と言って、毎年何回か尋ねられる。一番正直な答えは、「そこに関本至先生がいらっしやたから」であるが、もっともらしく、「ギリシア語は、細々とではあるが力強く、実に長い間途絶えることなく行われてきている。そんな言語にとっても興味を引かれたからだ」などと答えることが多い。確かにギリシア語は、歴史的にも文学的にも言語学的にも魅力ある言語であることは、多くの人が認めるところであろう。因みに、古典ギリシア語は、大学の2年生のとき、古典ギリシア語を学びはじめ、言語学専攻の授業で、クセノポンの『アナバシス』、ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』、『新約聖書』などを大学3、4年、大学院と少しずつ読解演習の授業で学習させてもらった。最初の内は、3行予習するのに1時間以上かかることもあった。

現代ギリシア語を学び始めたときも似たようなものであったが、文法は、取りあえず関本至先生の『現代ギリシア語文法』であった。先ず、これを独習し、それから関本先生にお願いして読書会を毎土曜日に開いてもらい、幾つかの短編を読みながら語学力（文法力）の向上をもくろんだ。そこには、言語学専攻の助手をされていた古浦先生もおられ、随分助けてくださった。物語を読み進むとき、辞書は言語学研究室にあるプロイアス、プリング、コッキティス、などの辞典を引きながら、表現や文法的な問題点は『現代ギリシア語文法』と首引きであった。他に、アンドレ・ミランベルの文法書なども利用したが、問題点のほとんどをこの文法書が解いてくれた。ただ、問題の語形あるいは文型の記述が何処にあるのか思い出せなかつたり分からなかつたりで、その解を見つけるのに時間がかかることもしばしばあった。

何年も前になるが、懐かしきギリシアでの友、福田千津子さんが、本文法書に関して、初学者には煩瑣であると言ったような書評を書かれたことがあったが、確かに当を得た評かもしれない。しかし、この「煩瑣」と言う言葉は、「それだけ詳しい」と言うことに繋がる。上にも述べたように、現代の文学を読むのに、本書が、あちらこちらと調べるのに時間はかかったが、色々な問題点のほとんどを解いてくれたのを覚えている。また、私がギリシアに留学したときに、ギリシア人の知人が話す語形や表現の形がなかなか分からなかった「サメ」や「ティナフト」などの口語体も本書のどこかに解説してあった。私が出たときになかなか分からなかったのは、本書をマスターしていなかったからである。

今は、荒木英世氏や福田千津子などの諸氏による多くの立派な現代ギリシア文法書や練習用のテキストが出版されているので、初学者にとっても心強い限りである。色々な文法書やテキストは、練習を組み込んだ授業などには好都合である。それぞれの特徴に合わせた色々な利用の仕方が考えられる。

ところで、現代ギリシア文を読むには、もちろん辞書が必要である。上でも述べたように、筆者が現代ギリシア語の学習を始めた頃は、現代ギリシア語—日本語辞典と言ったような代物は、夢にだに求められなかったが、最近はギリシア語—日本語の辞書も目に触れられるようになってきた。福田千津子氏の『現代ギリシャ語常用 6000 語』など日本人にとってはありがたい。なかでも、川原拓雄著『現代ギリシア語辞典』は、目を引く力作である。氏は、ギリシアに留学している間に収集した資料をもとに、既版の辞典にも当たりながら、独学で相当に詳しい現代ギリシア語—日本語辞典を完成させた。不足な点を挙げる批評家もあるかも知れないが、既版のプリングの辞書などにも収録されていないような語彙とか日本人に分かりやすい訳（表現）が施してあり、好辞典である。英仏独語などに堪能でない現代ギリシア語初学者にとって、大きな助けとなるであろう。英語や仏語などに弱い現代ギリシア語学習者が、英仏語の辞典で当該の単語の訳（説明）に行き着いても、その訳語の場に即した正しい日本語での理解が得られなければならない、時には異なった解釈になったりすることがあり、この点からも、本辞典は大変に有効である。ただ、辞書の価格であるが、川原氏の努力と苦勞を考えればあながち高価だとは言えないかも知れないが、学生たちにたやすく勤めることができるような価格ではないのが残念である。

近年、現代ギリシア語・文学を学ぶ諸兄が増えてきていることは、ギリシア語ギリシア文学会にとって誠に喜ばしいことであり、こうした状況の中で、またそれぞれに特徴を備えた文法書や辞典が出てくることであろう。ナジサメ！